

自蹊庵便り

平成三十年弥生

NO 130

（時のゆくえ 道具のゆくえ）

二月は暁の茶事にございます。早朝四時に集合ということは、東京から車で御来庵くださる皆様は、少なくとも二時頃には身支度を調べての御参加、身の引き締まる思いにございます。

今年さなかはインフルエンザも猛威を振るっている最中さなかのことゆえ、例年より一時間遅い五時席入の暁にございました。

毎年、暁を終える度に思いますことは、来年もできるであろうか：と。暁は時の移ろいが刻々と厳しく、今年のように五時席入では後座にはすっかり明けていて、しまりのないものになってしまいました。それでもできる間は多少のことは時に応じた妥協しながらも続けていきたいと思っています。

東金拙庵で二日間、一週間後の二日間は京都での暁にございました。荷を積み、京都までの長距離運転をし、荷を解き、暁の

茶事の仕度をいたします。

二日間寝不足ぎみの茶事を終えるあたりで到頭風邪をもらってしまいました。齢の性にしなくてはならなくなってきたという事でしょうか。

そんな中にまた一つ小さな事件ともうしますか、二日間の茶事を終え、翌日は残り福の食材で雛の点心を参加者の皆様と作る予定でしたので、あれやこれや考えながら献立を立てようとしていた矢先に一本の電話、十年間空き家になっていた茶室を取り壊すので、ほとんど残っていないと思いますが見に来ますか：との事。風邪気味ながら、無事に暁を終えた開放感も手伝って、電気も止めてあるので明るい内に：という先方の声に連れられ、スタッフや片付けに残っていて下さった二、三名と共に馳せ参じるはめに：。それからが大変です。ゴミにされては気の毒とばかりに、せつせと車に荷を積みむこと三十分、戻ってきてスタッ

フや皆さんには片付けの仕事を続けていただき、私一人、十年間という歳月の埃を丁寧に拭き清める作業延々：と、気がつけば夜中の二時を過ぎており、何と暁の三時起床からずっと今日一日、一本の電話から始まった予期せぬ出来事に動かされていたのです。きつと道具達が働かせたのでしよう。

私自身は、もう道具を整理する側の人間ですから必要ないのですが、次に続く世代の方々にも役立つ物があるやもしれず、俄骨董屋の面持ちでの作業にございます。

皆さんに目出て持ち帰っていただけのように道具達に咄しかけながら：。お陰様でほとんどの道具達が思い思いの許に引き取られて行きました。

突然に降って湧いた一本の電話、自分に必要なものはないのですが、ゴミになる運命を小耳に挟んだ以上、黙って見過ごせませんでした。道具には魂があります。お声

をかけてくださった御縁、たまたま行くことの出来た御縁、こういうときは、道具達が供養して欲しいと呼んでいるような気がいたします。

参加者の皆様の御協力のもと、部屋いっぱいにあった道具達がもらわれていきました。ゴミにされないで良かったですね…と、道具達にそっと語りかけながら一夜のおつきあいの道具達とお別れです。

今一つ身につまされたことは贅を尽くした銘木が随所にほどこされた茶室、十年も空き家になっていたとは思えないほど、壁に染み一つない三畳ほどの小間、明日にもスクラップされる運命かと思うと胸が痛みます。

それに引き替え、坪庭の蹲踞や灯籠、露地石達は、安心して見ていられます。いいねえおまえ達は破壊されようがなくて…。いずれも何処かの茶庭に納まることにございましょう。

自分が持ち合わせている粗末な道具達も、元気な内に旅立たせることを考えなくては…。私は水屋に少々残っていた風炉灰と点前用の炭を戴き、足許に何気なく置かれて

いた紙袋を覗いてみれば、露地草履、これは未使用のもの、いつか茶事をなさるつもりであったのでは…。これは私共で有難く使わせて頂くことにいたしました。

茶室、茶道具の運命というもの、茶道は三代続けなければ割が合わないとよく耳にします。残された家族にとつては茶に興味がなければゴミ同然です。身辺にその声いとま暇なく茶室に限らず高齢者なき後の空き家、社会現象、いえいえ社会問題になりつつあります。

取り壊しやむなしの实情 加速するばかりにございます。せめて心ある道具達が思いの所に身請けされていきますように…と。

自然界の樹木の営みは葉が落ち、土にかえり、子孫の健やかさを願うかのように、役目を全うします。人間界はどうもそのようなスツキリとしたサイクルに辿り着きそうもありませんね。人間界の課題多大にございます。

茶事教室の御案内

弥生の茶事（雛の茶事）

三月十一日（第二日曜）

三月十二日（第二月曜）

三月十三日（第二火曜）

席入 正午

点前担当・水屋実習者

午前九時

会費 一万円

卯月の茶事（観桜）

四月八日（第二日曜）

四月九日（第二月曜）

四月十日（第二火曜）

席入 正午

点前担当・水屋実習者

午前九時

会費 一万円

お礼の言葉

この度、「人生に愛される」という本が、講談社より出版される運びとなりました。身に余ること、分に過ぎたこと…との思いもありましたが、この齢になりますと何やら図々しさもより豊かに身についてまいりましたゆえ、お人に晒され晒され、晒されついで最後の止めの^{とど}のような覚悟のもとに実現したものにございます。

本と申しましても大層なものではなく、小さな小さな本です。(携帯にも便利です…編集子注) どなたもが電車の中でも気軽に読め、持ち重りのしない大きさ、衝動買いのできる値段、一人でも多くの皆様に手に取って頂けるよう、企画、構成のきめ細やかな配慮のもと、実現した本にございます。

自蹊庵便りを書き続けて二十年という歳月が流れました。本のおわりの頁にも書き添えましたように、茶事という仕事の性質上、多くの方から有難い礼状を賜ります。

あちらこちら出張しておりますと、一人お一人にお返事することが難しく、一つの手立てとしてお便りを発信することにし

たもの、そして、それが二十年続いているだけの駄文にございます。言うなれば茶事屋の繰り言、本当はこの茶事屋の繰り言のようなタイトルで将来的には少しまとめてみてもいいかしら…ぐらいに思っております。

そんな折、はずみと勢いに便乗して生意気なタイトルになってしまいましたがお若い方々に足を止め、手に取って頂くには「茶事屋のくりごと」では何のことか解りませんものね。

講談社エディトリアルの山口聡子氏、一年間茶事に御参加くださり、茶事への理解を深め、わたくしという粗忽者にも根気よくおつきあいくださつての実現にございます。

出来上がった本が届き、只今思いますことは、人はどんなに力んでも一人では何もなしえないということ、お一人お一人の出逢いが力となり、宝となり、やり続けていると何かが生まれてくるような気がいたします。

何かが生まれ、それが一つの形になるまでには、お米の八十八の手間の如く、多く

の支えがあつてのことになります。

お人との出逢い、それは奇跡の中で生かされ、更なる奇跡の恩恵に寄るものになります。誠に誠に有り得がたく感謝にたえません。

この先、神様がどんな風をふっと吹きかけて背中を押してくださるものやら、八十八歳という老いに入りゆく残生が楽しみにございます。

多くの皆様に御購読の御協力を賜りましたこと、紙面をお借りし、改めて御礼申し上げます。有り難うございます。

心より感謝申し上げます。

平成三十年弥生吉日

鶴の茶寮亭主 半澤鶴子